

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和4年4月14日（木）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立伊藤学園

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【国語】

1 定着状況についての概要

分類	2年			3年			4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	85.3	90.0	89.3	75.9	81.0	77.9	73.1	77.8	73.5	71.7	74.1	74.0	67.8	69.9	68.4
活用	60.0	64.3	61.2	48.8	49.3	45.6	55.0	62.9	55.6	53.8	59.7	54.5	46.3	53.5	47.7

2 具体的な課題とその要因

2年 「書くこと」領域の「文しょうをかく」記述問題で、目標値が70.0であるのに対し、正答率は65.4と下回った。全国平均の69.5よりもさらに低い結果となった。要因としては4点挙げられる。まずは、文に表すこと自体に苦手意識をもっていることだ。口頭では答えられても、文に表すと時間がかかってしまう。次に、作文の決まりがわかっていない。句読点が一番下にきたときの対応ができなかったり、段落を正しくつくれなかったりする。また、問題を正しく読み取れないことも課題である。問われていることは何か、守らなければならない決まりは何かを読み取れず、見当違いなことを書く児童も一定数いる。最後は、時間配分ができないことだ。この問題は最後にあり、時間がなかった児童もいると思われる。

3年 「言葉の学習」の「漢字の正しい筆順を理解している」という箇所が、目標値60.0に対して、正答率が51.2と下回った。漢字と初めて出会う時には筆順をきちんと指導するが、その後の確認が不十分であり、定着できなかったことが原因として考えられる。また、「手紙のへんじを書く」の「事柄の順序に沿って簡単な構成を考えている」「語と語や文と文との続き方に注意しながら、文章を書いている」という箇所が、目標値40.0に対して、正答率が29.1と下回った。さらに、「文しょうを書く」の「指定された長さで文章を書いている」という箇所が、目標値60.0に対して正答率が39.5、「自分の思いや考えが明確になるように、文章を書いている」という箇所が、目標値45.0に対して正答率が38.4と下回った。日頃から、長さのある文章を書く経験や、自分の思い・考えを書き表す場が不足していることが原因として考えられる。

4年 「言葉の学習」問題において、「ローマ字で表記されたものを正しく読んでいる」という箇所が、目標値70.0に対して、正答率が53.0と下回った。ローマ字の学習を国語の時間だけでなく、日常の中で取り入れていないため、定着できなかったことが原因として考えられる。「物語の内容を読み取る」問題において、「場面の様子について叙述をもとに捉えている」という箇所が、目標値40.0に対して、正答率が27.3と下回った。叙述に答えがあることを知らない児童がいることや段落ごとのつながりを意識していないことが原因として考えられる。「文章を書く」問題において「指定された長さで文章を書いている」（目標値60.0、正答率53.0）「自分の考えとそれを支える理由や事例を明確にして文章を書いている」（目標値65.0、正答率59.1）2つの箇所においてそれぞれ目標値を下回っていた。無回答の児童も多いことから、文章を書くということに苦手意識をもつ児童が多く取り組めなかったことが主たる原因として考えられる。

5年 「聞き取り」問題において、区の平均正答率82.2に対し校内平均75.0と下回った。話を最初から最後まで集中して聞くことが苦手である。普段の生活でも人の話を集中して聴くことができていない児童が多いことが要因であると考えられる。さらに、「漢字を書く」問題において、目標値の68.3に対し正答率が61.1と下回った。4年生までの復習問題に間違いが多くあった。漢字の小テストでも、既習の漢字が正しく書けない児童が多い。「物語」や「説明文」の読み取りは全国の平均を上回

っている。文章を読む力は高いことがわかった。

- 6年 「漢字を書く」問題において、目標値の70.0に対し正答率が45.9と大きく下回った。漢字を書くことについて課題があることが分かる。タブレット等で読むことには慣れているものの、文字を書く機会の絶対的な不足によって正答率が下回ってしまっていると考えられる。また、「話し合いの内容を聞き取る」問題において、「計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりするための工夫を捉えている」箇所が、目標値の70.0に対し正答率が59.0と下回った。普段から人の話を集中して聴くことができていない児童が多いことが要因であると考えられる。さらに、「説明文の内容を読み取る」問題において、「文章全体の構成を捉えている」箇所が、目標値の40.0に対し正答率が29.5と下回った。文章を読むことに苦手意識がある児童が多く、読む力が低いことがわかる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 2年 視写の練習を取り入れる。書かれた文章を正しく読み、また書かれている通りに視写することを通して、作文の決まりを身に付けるとともに、文章に書かれた内容を正確に把握する力を付ける。
- 3年 授業時の発問・プリント学習などにおいて漢字の筆順を問う機会を増やし、筆順を意識して正しく書けるように指導を行う。また、文章を書く単元において、作文を書く前に文章の構造を簡易的に図に表したり、書きたいことをメモに書き出したりして検討してから、実際の作文に取り組む。
- 4年 タブレットを使用した学習の際に、ローマ字入力を推奨し、ローマ字に慣れ親しませ、習慣化をはかる。国語の授業において、「本文のどこに書かれているか」と問う発問を多く取り入れた授業を行い、叙述を基に考えるくせをつけさせる。そして、条件を付けて文章を書くことも適宜取り入れ、書くことに苦手意識を作らないようにする。
- 5年 「聞き取る」力が付くように、聞き取った内容を書かせる活動を時々取り入れる。漢字の書き取りの小テストは定期的に取り組ませているが、さらに漢字を書く機会を確実に増やしていくために確認テストを行う。漢字に興味が出るよう、授業の内容を工夫する。漢字の学習を主とした単元での学習を丁寧に行うようにする。書くことに慣れさせるためには、定期考査で短作文をくり返し出題するなどして、文章を書く機会を増やしていく。
- 6年 漢字の書き取りの小テストを定期的に取り組ませ、漢字を書く機会を確実に増やしていく。また、同じ内容の小テストを繰り返し実施し漢字を書く力を定着させていく。漢字の学習を主とした単元での学習を丁寧に行うようにするなどして、第5学年までの漢字を確実に書けるように指導していく。聞き取りについては、話を聞きながらメモをとる練習を行い、注意深く話を聞く姿勢を育てる。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 2年 「文章を書く」問題で、作文の決まりや問題内容の理解にも意識を向け、次年度は全ての内容で目標値を上回る。
- 3年 「言葉の学習」「文章を書く」問題で、次年度は全ての内容で目標値を上回る。
- 4年 「言葉の学習」「物語の内容を読み取る」「文章を書く」問題で、次年度は全ての内容で目標値を上回る。
- 5年 定期考査で短作文を取り入れ、「書く」領域で、目標値や全国の正答率を上回る。
- 6年 無回答の数値を減らして「書くこと」の正答率を上げ、全ての領域で、目標値や全国の正答率を上回る。

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【国語】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	60.9	68.1	62.2	66.8	75.8	71.4	64.2	69.9	66.1
活用	47.8	54.8	48.1	54.4	65.4	57.8	62.8	78.3	70.2

2 具体的な課題とその要因

- 7年** 基礎問題において、「言葉の領域」の「連用修飾語について理解している」選択問題と、活用問題において、「話を聞く領域」の「意図に応じて話の内容を捉え適切な質問をしている」記述問題で、それぞれ前者は目標値の40.0に対し正答率が26.3、後者は目標値の40.0に対し正答率が24.6と下回った。文節についての理解と、問題の意図を正確に理解できていないことが要因である。
- 8年** 我が国の言語文化に関する事項については、目標値が85.0に対し80.0と、唯一下回っている。原因として、知識・技能に関する学習内容を反復して取り組み、定着させることができていないと考える。
- 9年** 9年生も我が国の言語文化に関する事項については、目標値が80.0に対し74.5と、下回っている。また、漢字を書くについては、目標値が65.0に対し63.5と、やや物足りない結果になった。漢字を書いて覚えても、定着していないことが原因であると考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年** 文法のしくみや用語の理解では、eライブラリなどの練習問題に取り組み定着を図る。場に応じた適切な発話は、スピーチやインタビューの授業を通し、自分で考えながら取り組むことで身に付ける。
- 8年** eライブラリを活用し、生徒が自分で文法や語句の学習内容に取り組むようにしていきたい。また、定期的に漢字を含めた知識・技能に関する問題に取り組み、定着を図っていきたい。
- 9年** 漢字を例文で書いて覚える学習に取り組んでいるが、まだまだ足りていないと思われる。漢字検定の問題に取り組みさせるなどし、各自がどのくらいの漢字が書けるのかを自覚させることが必要である。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 7年** 基礎については70%、活用については60%以上超えるようにしていきたい。
- 8年** 歴史的仮名遣いについては85%の正答率を目指して、練習問題に取り組む。
- 9年** 漢字の書きについては、目標値から5%上を目指して、繰り返し定着を図っていく。助動詞の理解は40%、歴史的仮名遣いは75%を超えるように、フォローアップ問題に取り組む。

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【社会】

1 定着状況についての概要

分類	4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	69.5	73.9	69.7	68.3	73.5	73.0	71.2	71.5	72.8
活用	59.4	69.5	66.2	56.7	59.3	59.0	56.3	61.1	60.9

2 具体的な課題とその要因

- 4年** 「市の様子の移り変わり」問題において、「市の人口の変化を読み取っている」という箇所が、目標値 50.0 に対して、正答率が 42.4 と下回った。誤答分析によると、グラフを正しく読み取れる集団とそうでない集団に分かれている。グラフ等の資料を用いた学習が習慣化されていないため読み取ることができなかつたのではと考えられる。「くらしの移り変わり」問題において、「道具の変遷について理解している」という箇所が、目標値 70.0 に対して、正答率が 63.6 と下回った。題意を正しく読み取ることができていないことが原因と考えられる。
- 5年** 領域別の正答率を見ると、「くらしをささえる水」「特色ある地域の様子」は目標値、全国平均を上回った。「都道府県の様子」「ごみのしよりと利用」「自然災害からくらしを守る」「先人の働き」は全国平均を下回った。日々の授業内で地図帳の活用が十分でないため、「都道府県の様子」や「地図の読み取り」に課題があると考えられる。
- 6年** 領域別の正答率を見ると、「日本の水産業、工業」は目標値、全国平均を上回った。「世界の中の国土」「日本の国土と人々の暮らし」「日本の食糧生産」では、全国平均を下回った。日々の授業内で地図帳の活用が十分でないため、「日本国土の様子」や「八方位を含めた地図の読み取り」に課題があると考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 4年** 社会の資料を読み取る際に、グラフを多く取り入れ、丁寧に読み取る作業を行う。また、読解力を養うため、読み物の資料も多く取り入れる。
- 5年** 今年度、正答率が低かった都道府県の特徴に重点を置く。日本の産業の学習の際に、地図帳や動画資料を活用し、都道府県の位置関係についても理解させる。教科指導書付属資料の単元まとめプリントを活用し、知識の定着を図る。
- 6年** 今年度、正答率が低かった国土の様子に重点を置く。基礎的な地図の読み取りはできているため、地形と事象の因果関係について考えさせる場面を設ける。日本の歴史の学習の際に、意図的に地図帳や動画資料を活用し、その時代の国土の様子や現在の都道府県等の位置関係についても示す。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 4年** 「市の様子の移り変わり」「くらしの移り変わり」の問題で、次年度は全ての内容において目標値を上回る。
- 5年** 「地図の読み取りに関する基礎分野」の正答率が目標値を上回る。
- 6年** 「地図の読み取りに関する活用分野」「日本の国土に関する基礎分野」の正答率が目標値を上回る。

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【社会】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	54.0	53.3	52.7	59.3	55.6	59.4	59.0	60.8	58.9
活用	52.5	55.1	53.5	50.0	46.0	49.3	44.4	48.0	44.8

2 具体的な課題とその要因

- 7年 問題の内容別正答率では「縄文時代～平安時代」が目標値 53.0 に対し、校内の平均正答率が 49.8 と大きく下回った。また、観点別正答率では「知識・技能」が目標値 54.2 に対し、校内の平均正答率が 51.3 と下回った。基礎的な用語の定着が不十分であることが考えられる。
- 8年 領域別正答率では、歴史的分野の正答率が目標値 57.5 に対し、校内の平均正答率が 49.7 と大きく下回った。前年度の前半に学習した内容が定着していないことが考えられる。また、基礎・活用ともに目標値に対して、正答率が低いことから、基礎的な知識の定着が不十分であると考えられる。
- 9年 問題の内容別正答率では、「ヨーロッパ人と出会いと全国統一」が目標値 54.2 に対し、校内の平均正答率が 53.7 と下回った。領域別正答率では、地理的分野は目標値に対し大きく上回っていることに対し、歴史的分野は目標値と変わらない数値となっている。歴史的分野の内容の定着が比較的課題であると考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年 古代（縄文時代～平安時代）の学習では、各時代の流れや特色を理解できるように、単元の終わりにまとめの学習を取り入れる。前後のできごとを関連付けながら、各時代の特色を説明できるようにする。用語を定着させるために、単元テストでは、用語を記述する問題を意図的に取り入れ、授業では、授業の初めに前時の授業で学んだ用語を記述する時間を設ける。
- 8年 歴史的分野の学習では、各時代の流れを理解するだけでなく、基礎的な知識は確実に身に付けられるように、主体的に学習する機会を設けるようにする。また昨年度に学習した内容を復習するための、小テストなどを行い、定着が不十分な分野を補充していく。
- 9年 歴史の単元ごとで、時代の流れを意識させるだけでなく、各時代の特色を確実に理解することができるように、単元テストや小テストを活用する。また時代ごとで定着度の差が出ないように、復習課題を設け、個人の苦手克服に向けて取り組む。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 7年 基礎・活用ともに校内の平均正答率が目標値を3%以上上回ることを目標とする。
- 8年 基礎・活用ともに校内の平均正答率が目標値を3%以上上回ることを目標とする。
- 9年 基礎・活用ともに校内の平均正答率が目標値を上回ることを目標とする。

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【算数】

1 定着状況についての概要

分類	2年			3年			4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	82.3	83.9	83.4	76.3	84.0	77.6	75.8	80.1	76.8	69.3	70.9	66.3	68.2	72.5	67.8
活用	58.8	65.1	59.0	61.3	70.9	63.0	60.0	64.5	60.0	52.7	56.1	49.3	50.6	59.8	50.3

2 具体的な課題とその要因

- 2年** 「120までのかず」において、全国平均が90.3に対し、正答率が89.7である。100をこえた数について、数量の感覚がもちにくく、実際の量感として捉えることが難しい。3位数になると、数直線の中での数の並び方が分からなくなる児童がいる。
- 3年** 「たし算・ひき算」の「加法の結合法則を用いて、考え方に合うように式に括弧を書いている」という箇所が、目標値55.0に対して、正答率が44.2と下回った。括弧の役割の理解や、計算方法の理解はできているが、「場面や思考」と「式で表すこと」との結びつきが弱く、言語化・式化が不足していることが原因と考えられる。
- 4年** 「長さ・重さ」問題において、「地図から道のりを読み取って、その和を求めることができる。」という箇所が、目標値80.0に対して、正答率が72.8と下回った。問題文から道のりを読み取ることができずに間違えてしまったことが原因として考えられる。
- 5年** 「いろいろな形」の単元で全国平均が56.9であるのに対し、校内正答率は51.2と数値が下回っていた。さまざまな図形の特徴について、定着していなかったことが原因と考えられる。
- 6年** 「立体と体積」において、正答率が72.7で全国平均の69.5は越えたものの、区の平均値の80.4よりも下回った。立体の体積の求め方や量感を考える力が低いと考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 2年** ブロックや100のまとまり・10のまとまりを表すものなど、半具体物を使って、量感を捉える活動を増やし、位取りの考え方を理解することができるようにする。数直線での目盛りにより、1ずつ、5ずつ、10ずつ増えるときの数の並び方についての問題などを習熟する時間をとり、数の概念をしっかりと身に付けるようにする。
- 3年** 授業で比較・検討を行う場面において、他者の考え方を説明したり、式に表したりする機会を増やす。その際には、挙手による発言のみならず、ICT機器を用いての比較・検討や、グループ討議などを交えて、多様な考え方を言語化・式化できるようにする。
- 4年** 数直線を多く取り入れたり、絵から道のりを読み取らせたりする授業を行い、問題に慣らせていく。
- 5年** 普段の学習で振り返るだけでなく、宿題等で、図形についての復習をし、問題に慣れるようにする。
- 6年** 立体を多角的に見て、どのように体積を求めていくかという思考力を高める指導をこれまで以上に活動に取り入れ、計算の処理だけでなく、立体のイメージを捉えながら考えるようにする。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 2年 100 をこえる数における数の並び方や位取りについての問題で、次年度は目標値を上回る。
- 3年 「考え方に合うように式に表す」問題で、次年度は全ての内容で目標値を上回る。
- 4年 「長さ・重さ」問題で、次年度は全ての内容で目標値を上回る。
- 5年 全ての領域・問題内容で目標値を上回る。
- 6年 全ての領域・問題内容で目標値を上回る。

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【数学】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	69.3	75.0	70.6	60.2	68.8	58.2	60.7	64.9	55.2
活用	62.1	73.5	63.5	55.0	62.1	52.3	49.4	57.1	46.0

2 具体的な課題とその要因

- 7年** 「平面図形（対称移動）」で目標値や全国平均値を下回っている。線対称な図形について対称の軸が何本あるかを求めることができていない。対称移動についての概念や、言葉の意味を理解できていないように見受けられる。
- 8年** すべての項目で全国平均、目標値を上回ることができた。基礎も活用も概ね定着をしてきている。データの活用に関しては、目標値との開きが少なく、理解が不十分であると考えられる。
- 9年** すべての項目で全国平均、目標値を上回ることができた。基礎も活用も概ね定着をしてきている。設問ごとの解答を見ていくと、式の計算の式変形の仕方や連立方程式の立式の理解が不十分な生徒がいる。分配法則や式の意味についての理解が不十分であると考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

- 7年** 「平面図形（対称移動）」は、移動の概念を感覚的に身に付ける必要があるため、授業内で実際に平面図形を動かすなど、体験活動を積極的に取り入れていきたい。また、既習事項（前期課程算数科）の復習も取り入れるなど、繰り返し学習できる授業を展開していく。
- 8年** 「データの活用」については、「確率」の学習を軸としながら、既習事項のデータの分布の傾向と関連させて復習する機会を設けていく。加えて、今後も学び合いの活動を取り入れることで、生徒同士で理解を深めていく機会を充実していく。
- 9年** 式の計算や方程式は毎年扱う内容であるため、既習事項を合わせて指導していく。また、学び合いの活動を取り入れることで、理解が不十分な生徒の理解を深めていく。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 7年** 苦手である「平面図形（対称移動）」の分野については、図形を紙で動かすなどして具体物を用いて指導する。全国平均値や目標値を上回れるようにする。その他の分野では、全国平均値や目標値を5.0ポイント以上上回れるように指導していく。
- 8年** 学び合いの学習を軸として、深く考え抜く時間を多く確保することで、日頃の授業から理解度を高めていく。その上ですべての項目で目標値や全国平均を5.0ポイント以上上回れるように、引き続き指導していく。
- 9年** 目標値を上回っているが、さらに5.0ポイント以上上回れるように、学び合いの活動を通して、理解が不十分な生徒の理解を深め、習熟度に合わせた指導をしていく。

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【理科】

1 定着状況についての概要

分類	4年			5年			6年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	70.7	75.9	70.3	71.2	69.1	72.1	79.1	84.7	82.9
活用	43.9	49.5	44.5	45.0	46.1	42.4	84.4	87.1	88.7

2 具体的な課題とその要因

4年 「太陽と地面のようす」問題において、「棒温度計の目盛りの読み方を身に付けている。」という箇所が、目標値 75.0 に対して、正答率が 66.7 と下回った。誤答分析によると正しく理解している集団と誤って理解してしまっている集団との二極化であった。実験器具を正確に使うための知識と技能が身に付いていなかったため、温度計の問題が読み取れなかったのではないかと考えられる。

「電気の通り道」問題において、「電気を通す物と通さない物を理解している」という箇所が、目標値 80.0 に対して、正答率が 69.6 と下回った。さらに「回路を理解している」という箇所でも、目標値 70.0 に対して、正答率が 64.7 と下回っている。電気の単元は、キットを使用して作って終わりということがあり、学習が定着していないことが原因と考えられる。

5年 領域別の正答率を見ると、「物質・エネルギー」は目標値、全国平均を上回った。「生命・地球」は目標値、全国平均を下回った。分野別に見ると「1年間の動物のようす」「自然の中の水」で課題がある。1年間の動物の様子を動画を見て終わりだったため学習が定着していないことや、観察実験の知識不足が考えられる。

6年 領域別の正答率を見ると、「物質・エネルギー」「生命・地球」ともに目標値、全国平均を上回った。分野別に見ると「植物の発芽と成長」「植物の花のつくりと実」「人のたんじょう」で課題がある。
前期課程理科の全体の傾向として、物質・エネルギー分野の正答率が高く、生命・地球分野の植物や人体など中身が見えにくく抽象的な学習が多くなる領域で正答率が低い。各領域の基本的な知識が身に付いていないことや観察実験の知識不足が要因として考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

4年 実験器具を取り扱う際には、事後に行う小テストの数を増やし、定着を図る。また、電気の単元は、キットだけに頼るのではなく、なぜそうなるのかをしっかりと考えさせて、丁寧な指導を行う。

5年 今年度、正答率が低かった「1年間の動物のようす」「自然の中の水」に重点を置く。1年間の動物のようすについて、実験や動画資料を通して、理解させる。教科指導書付属資料の単元まとめプリントを活用し、知識の定着を図る。

6年 今年度、昨年度と正答率が低かった「植物の発芽と成長」「植物の花のつくりと実」「顕微鏡の使い方」に重点を置き、実際に実験を行いどのような構造になっているのかなど自分の体験と知識を結びつけることや、動画資料や教科指導書付属資料の単元まとめプリントを活用し、知識を定着させる。「顕微鏡の使い方」については、具体物の操作をもとに理解できるようにする。

4 次年度の数値目標（成果指標）

- 4年** 「太陽と地面のようす」「電気の通り道」の問題で、次年度は全ての内容において目標値を上回る。
- 5年** 「生命・地球」および「基礎」の正答率が目標値を上回る。
- 6年** 「植物の発芽と成長」「植物の花のつくりと実」「顕微鏡の使い方」の正答率が目標値を上回る。

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【理科】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	67.0	70.7	69.3	58.9	66.3	59.7	55.0	52.6	55.1
活用	50.0	51.3	47.0	45.5	44.1	40.8	52.3	52.9	51.1

2 具体的な課題とその要因

7年 基礎に比べて、活用は目標値を1.3しか上回っていない。その原因は活用の問題内容の光合成と地層についての記述が大きく目標値を下回っているという点が大きいの。その内容の理解をさせることもそうだが、文章で答えられるようになることも課題である。観点別正答率の項目の「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」はどれも目標値を上回っているが、「知識・技能」は1.9上回っているだけである。基礎的な知識と実験の操作方法などを理解し、定着させることが課題である。

8年 観点別正答率については「知識・技能」の目標値57.8に対し正答率65.6、「思考・判断・表現」の目標値52.1に対し正答率53.8、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値45.8に対し正答率45.3であった。「主体的に学習に取り組む態度」の学習内容の定着が課題となる。「知識・技能」はあるので、学習意欲に繋げる工夫が必要であると考えられる。

9年 観点別正答率で「主体的に学習に取り組む態度」が目標値43.3に対し26.7と大きく下回った。普段の授業の中でも学習内容が難しくなっている分、苦手意識をもっている生徒が多いことが原因と思われる。合わせて、コロナ禍のなか8年次の化学変化の分野の実験を行うことができなかったため、これも目標値の48.3より大きく下回り19.9となった。

3 課題解決のための方策（取組指標）

7年 問題の内容別正答率が目標値を下回った「動物のからだのつくりとはたらき」、「月と太陽」、目標値とほとんど変わらない「物の燃え方」、「大地のつくりと変化」について反復演習を行い、基礎を定着させていく。特に7年生の単元に含まれない「月と太陽」、「物の燃え方」については復習を行うタイミングを今年度学習すべき単元とまざらないようにしながら、8・9年生につなげていく。

8年 授業で観察、実験（演示実験も含）を多く取り入れ、自然や科学現象と触れる機会を増やすとともに、結果から考察することを繰り返し行っていく。また、実生活と学習内容との関わりとを気付かせ、興味をもたせながら学習内容の定着を図っていく。

9年 授業の中で関連する既習の内容も復習しながら、苦手意識の強い化学分野については小テストなどを活用し、繰り返し学習を行い、学習の定着を図る。また、身近な事象と結びつけて、調べ学習などをおして、興味・関心を高め、学習意欲を高める。

4 次年度の数値目標（成果指標）

7年 「基礎」は目標値以上、「活用」は目標値の3%以上を目標とする。

8年 「基礎」「活用」共に目標値の5%以上を目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

9年 「基礎」「活用」共に目標値の5%以上を目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【英語】

1 定着状況についての概要

分類	6年		
	目標値	校内	全国
基礎	79.1	84.7	82.9
活用	84.4	87.1	88.7

2 具体的な課題とその要因

6年

「単語を読む」問題において、目標値の86.7に対し正答率が86.3と少しだが下回った。全体的に見ると、聞くことよりも書くことにおいて課題が見られる。書くことの中でも、英文の完成・英作文が目標値よりも低い。話すこと、聞くことが中心で、英文の完成や英作文といった問題に慣れていないことが正答率の低い要因として考えられる。

3 課題解決のための方策（取組指標）

6年 英文の完成の問題を授業時間で扱い解く。英語の簡単な文法や用法に偏らないように配慮し、日本語と英語の語順等の違いについての学習を取り入れる。

4 次年度の数値目標（成果指標）

6年 全ての領域で、校内正答率が目標値・全国正答率を上回る。無回答が4%以下になる。

令和4年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【英語】

1 定着状況についての概要

分類	7年			8年			9年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	79.6	87.8	81.5	57.2	63.3	63.1	58.8	67.0	58.3
活用	73.5	81.9	73.4	52.5	57.7	55.7	49.1	58.5	46.1

2 具体的な課題とその要因

7年 内容別に目標値と校内平均正答率の差を比較すると、「英文の完成」と「英作文」の項目で達成率が低い。いずれも「書くこと」に関する領域の問題であり、小学校においてはまだ書くという活動を重点的に行っていないことが原因と考える。

8年 「聞くこと」の点数が平均を下回っていることから、授業内で英語を聞く時間を確保する必要がある。場面に応じて書く英作文においては目標値をわずかに上回ることができたが、改善の余地がある。文法の理解不足や英作文に取り組む時間の短さが要因である。

9年 活用問題において、「長文の読み取り」が目標値より5.9しか上回っていない。また英文を理解し、場面に応じて英文を書くことにも課題がある。観点別にみると「思考・判断・表現」は他の観点と違い6割を切り、54.1であった。「語形・語法の知識理解」の数値が目標値よりも高い数値ではあるが58.1と6割に満たない理解度であるため、基礎的な単語、文法の復習をして取り組み、定着させることができていないことが要因と考える。

3 課題解決のための方策（取組指標）

7年 授業でワークシートを活用し、文を構成する力を定着できるようにする。ワークシートで並び替え問題や和文英訳のような英作文の問題演習で目に見える形での英語表現に取り組む。また、英文を構成する力を身につくよう、基本文の暗唱やアクティビティのような言語活動を行う。

8年 基礎的な文法学習に一層力を入れる。文構造など、7年時の復習も行い、定着を図る。また、教科書にある問題にも丁寧に取り組ませ、「聞くこと」の力を高めさせる。聞く力を高めるために音読の時間も増やし、音と文字の関係性についても整理させる。状況を理解して英文を書く力が必要であるため、英作文の問題や時間も増やしていく。

9年 「長文の読み取り」する力を向上させるために、新聞記事など様々な形式の文章を読む活動を取り入れる必要がある。文を読むだけでなく、グラフや資料などから正しい情報を読み取ることも必要である。「状況に応じた表現活動」については授業内でESAT-Jのテストを見据えて、お題に対してすぐに自分の意見を言う活動を増やしたり、話した内容を書いたり、生徒と教師のやり取りの中から生徒が適した表現を活用できるように促していく。

4 次年度の数値目標（成果指標）

7年 「書くこと」の領域でどの設問にも校内正答率が80%を上回る。更に基礎学力が定着するよう生徒全体の学力の底上げを図る。

8年 音読、リスニングに取り組む時間をさらに増やし、「リスニング（内容理解）」、「リスニング（対話時の応答）」において、65%に到達する。

9年 授業中に読んだり、書いたりする活動をさらに増やし、「長文の読み取り」や、「場面に応じて書く英作文」で、50.0%を上回る。「思考・判断・表現」の観点で現在の数値より5%上がる。